

## 2016京生研基調～若い教師からの応答～を読む

牧本富雄

### 1. はじめに

2013年の全生研京都大会で若い仲間が大きな一歩をふみだすことを決意して3年、ついに京生研の心臓部である基調づくりを彼らが担うことになった。特に「K」からの集団づくりを若い仲間がどうとらえているのか、さらに激変する状勢をどうとらえそれに対する実践をどう提起しようとしているのか、大きな期待を持ちながら提起を読んだ。結論から言えば、彼らの提起を大いに支持する立場であるが、論議のあった部分について述べたいと思う。

また、実践については、他府県の若い実践家がどんな実践を提起しているのか学ぼうということで、福岡から森さんを招いて、『「圭君、おもしろいやん！」といえる学級を目指して』をレポートして頂いた。この実践については、別項で谷尻さんが分析を書くので参照されたい。

情勢分析については、独裁的な政治情勢とこれに連なる学校現場における閉塞感は、基調の指摘している通りだと思し違和感はない。一方でこの現状に対して若者を中心としたシールズの活動や沖縄での平和を追求する動きも明らかにし、状況に負けない新たな動きや粘り強いしたたかな動きとして紹介することも必要ではないか。

安保世代の仲間からは、第二次世界大戦の反省から平和と民主主義が最も大切だと決意したにもかかわらず、戦争ができる国づくりへと歩み出そうとする安保政策に対し、待ったをかけた動きがあったからこそ、70年もの間戦争に巻き込まれなかった。いま行動を起こしているシールズの活動や沖縄での平和を求める動きは、暴走する権力側に待ったをかける1つになるし、今後の日本の歩みに大きな影響を与えるとの評価があった。

### 2. 若い教師と「K」とのつながり

基調では、若い教師の状況と「K」の捉えづらさについて次のように述べている。

京生研に集う若い教師は自分の生い立ちの中での社会の矛盾をはらんだ経験を越えるために教師をする者が多いように思う。しかし、そんな若い教師は、自分たちで意見を表明し、闘争し、行動によって組織的に権利を獲得したり環境を変えてきた経験がほとんどない。権利は自然と与えられ、環境は用意され、その範囲でしか生きてこ

なかった。もしくは生きることを要求されそれに従ってきた。そういう意味では若い教師もまた、包摂され生きてきたのかもしれない。この点が自分たちで要求を突きつけながら変革を勝ち取ってきた京生研退職教師やベテラン実践家と決定的に違う。しかし、だからこそ子どもたちの世界を豊かに発展させ、民主的な社会の担い手として子どもたちを育て、社会を変革しようとする京生研の思想に強く惹かれるのだ。京生研は元来、学級の中の最も困難な課題を抱えた子「K」に率先して取り組んできた。最も困難な課題を抱える子は社会問題の縮図がその子の背景にある。その子に関わり問題に取り組むことは社会の問題に取り組むことである。社会を変えることは、その社会の中で生きる自分を変えることに繋がる。

以前から子ども集団の捉え方として提起されてきた、前進層 良心層 中間層 煽る層 課題層といった捉えられ方から、情勢や子どもを取り巻く生育的な状況や教育の変化によって子ども集団が総中間化してしまい、構造的に分析することは大変困難になっている。過去校内暴力期における「K」はつっぱり生徒だった。それは、行動的にも、見た目にも、生活の面からも明らかに課題が表面化しており、Kとして特定することができたのだ。しかし、今日の教室の中にはこのような生徒は見られることは少ない。小学校入学時からの規律、規範主義的な管理された学校教育の中でこのような課題を持った子は学校から排除されてしまうか、排除されないように集団の中に潜り込んでしまう。もしくは、内外面に課題を抱えていたとしても、それは突っ張りという形では無く、不登校、愛着障害、リストカットなど中々捉えづらい違う形で内出させる。このように集団が総中間層化する中で、中間層の中に潜り込む課題を抱える子、例えば発達の課題、生育的問題、家庭の問題、人間として繋がることの課題を抱える子がいる場合、元来京生研のイメージする学級づくり、つまりKを中心に据え、リーダーを育て、中間層の問題をあぶり出すというプロセスの第一段階、「K」の特定の段階でまずつまづく。リーダーやKに取り組む以前に、中間層の中に課題がそれぞれに散見されるため、そちらの指導に終始してしまい誰をKとするのか（それは同時に誰をリーダーと見るのかにもつながる）と特定することが非常に困難になっている。つまり、「あの子にも手を取られる、あの子にも指導が必要だ、あの家にも支援がいる、、、」といった多くの多様な課題を持つ子に関わらざるを得ない状況がクラスの中に見られているのではないか。それが、京生研外から指摘される「クラスの中にKは複数存在するのではないか」といわれる一因になっている。

権力側は、懐に忍ばせた剣を『豊かな暮らし』というフレーズでカモフラージュし、虎視眈々と自分たちに都合の良い社会をつくろうとしている。彼らもまた、戦後民主主義から多くのことを学び、権力を持たない我々が手をつなぐことができないように巧みに政策を打ち出してきている。それが故に、状勢を最も色濃く反映する子どもたち「K」の出現が見えにくくなっているとしたら、またその真っ只中で生きている若者達だとしたら、逆に「K」を特定し共感しやすい立場にいるのではないか。また、「K」はすでに学校教育から見えなように排除されているのではないかと京生研の仲間は指摘する。実際、京都の少なくない地域で、緩やかに排除された「K」達は、不登校という名の下に地域に置き去りにされ、通信制高校などに囲い込まれている。

この先、日本が他国との紛争に巻き込まれていくとしたら、先日の防衛大の卒業生達が自衛隊に残らない人数が過去4番目だったことからわかるように、自衛隊へ入隊する人数は少なくなることが予想される。そのとき、排除された「K」達の中で男性は、自分が生きていく場として自衛隊に参加していくのではないか。また、女性は夜の街で身を削りながら生きていくことを余儀なくされていくのではないか。

いま京都の退職教員の仲間は、不登校という名の下に地域に置き去りにされ、通信制高校などに囲い込まれている子どもたちを援助し、彼らが社会の主権者として生きていけるように伴走している。現場では、基調に紹介されているような実践でしたたかに戦っている。そして、ここから我々が取り込まれようとしている現実を直視し、異議申し立てをしようとしている。まさに「K」から社会を変革しようとしているのである。

### 3. 『「第二の加害者」は、あなたたちです』・・沖縄からのメッセージ

私は、最も抑圧された側（京生研のいう「K」）から集団を見たとき、その集団の持つ本質がわかることを様々な機会に学び、彼らの自立に寄り添い続けることが、その集団そのものを本当の意味で自立させていくのだという事を知っている。

先日の沖縄での事件について、沖縄からの若い仲間からのメッセージを受けると、日本の本質が見え、どんな行動をしていかなければならないか見えてくる。「K」を見捨てる時、彼らの苦悩に気づかないとき、私たちは第二の加害者になるのだという思いを忘れてはいけない。

沖縄で19日に開かれた「県民大会」で、若い世代を代表して登壇した名桜大4年の玉城（たまき）愛さん（21）のスピーチ全文は次の通り。

被害に遭われた女性へ。絶対に忘れないでください。あなたのことを思い、多くの県民が涙し、怒り、悲しみ、言葉にならない重くのしかかるものを抱いていることを絶対に忘れないでください。

あなたと面識のない私が発言することによって、あなたやあなたがこれまで大切にされてきた人々を傷つけていないかと日々葛藤しながら、しかし黙りたくない。そういう思いを持っています。どうぞお許してください。あなたとあなたのご家族、あなたの大切な人々に平安と慰めが永遠にありますように、私も祈り続けます。

安倍晋三さん。日本本土にお住まいのみなさん。今回の事件の「第二の加害者」は、あなたたちです。しっかり、沖縄に向き合っていただけませんか。いつまで私たち沖縄県民は、ばかにされるのでしょうか。パトカーを増やして護身術を学べば、私たちの命は安全になるのか。ばかにしないでください。

軍隊の本質は人間の命を奪うことだと、大学で学びました。再発防止や綱紀粛正などという使い古された幼稚で安易な提案は意味を持たず、軍隊の本質から目をそらす貧相なもので、何の意味もありません。

バラク・オバマさん。アメリカから日本を解放してください。そうでなければ、沖縄に自由とか民主主義が存在しないのです。私たちは奴隷ではない。あなたや米国市民と同じ人間です。オバマさん、米国に住む市民のみなさん、被害者とウチナーンチュ（沖縄の人）に真剣に向き合い、謝ってください。

自分の国が一番と誇るということは結構なのですが、人間の命の価値が分からない国、人殺しの国と言われていることを、ご存じですか。軍隊や戦争に対する本質的な部分を、アメリカが自らアメリカに住む市民の一人として問い直すべきだと、私は思います。

会場にお集まりのみなさん。幸せに生きるって何なのでしょう。一人一人が大切にされる社会とは、どんな形をしているのでしょうか。大切な人が隣にいる幸せ、人間の命こそ宝なのだという沖縄の精神、私はウチナーンチュであることに誇りを持っています。

私自身は、どんな沖縄で生きていきたいのか、私が守るべき、私が生きる意味を考えるということは何なのか、日々重くのしかかるものを抱えながら現在生きてい

ます。

私の幸せな生活は、県民一人一人の幸せにつながる、県民みんなの幸せが私の幸せである沖縄の社会。私は、家族や私のことを大切にしてくれる方たちと一緒に今生きてはいるのですが、全く幸せではありません。

同じ世代の女性の命が奪われる。もしかしたら、私だったかもしれない。私の友人だったかもしれない。信頼している社会に裏切られる。何かわからないものが私をつぶそうとしている感覚は、絶対に忘れません。

生きる尊厳と生きる時間が、軍隊によって否定される。命を奪うことが正当化される。こんなばかばかしい社会を、誰が作ったの。このような問いをもって日々を過ごし、深く考えれば考えるほど、私に責任がある、私が当事者だという思いが、日に日に増していきます。

彼女が奪われた生きる時間の分、私たちはウチナーンチュとして、一人の市民として、誇り高く責任を持って生きていきませんか。もう絶対に繰り返さない。沖縄から人間の生きる時間、人間の生きる時間の価値、命には深くて誇るべき価値があるのだという沖縄の精神を、声高々と上げていきましょう。

数年前、クラスのリーダーが、困難な課題を背負った仲間の学習会に参加できないときに、「私は仲間の手助けをすることができないことが悔しい。どうしたらいいのですか」と問われたとき、「その気持ちを持ち続けることが、彼と伴走することにつながる」と答えたのを覚えている。さて、みなさん「K」と共に誰もが住みやすい社会をつくってみませんか。